

第59回 松江藩のお家騒動・その2〈殿様斎貴〉

コラム第55回では「松江藩のお家騒動・その1」と題して、首謀者と目される三谷忠太郎の動向を掲載した。

(1) 史料に現れない御家騒動

「松江藩の御家騒動」とは九代藩主斎貴の頃、藩内で密かに斎貴を廃して広瀬藩主直諒を迎えんとする陰謀が仕組まれていたというもので、それが露見したため、津山藩から定安を迎え、娘熙姫に配して10代藩主とし、斎貴は嘉永6年(1853)9月5日隠居したと旧版『松江市誌』が古老の話をまとめた「黒川正健私記」をもとに記している事柄である。

しかし、その事実関係は史料的に裏付けられたものはない。これは「御家騒動」などと位置づけられていない事象である。そして、前回コラム55回で記したように三谷忠太郎は「同輩家老達との不和」が名目で失脚し、幽閉されたと三谷家の文書には記されている。同輩家老達との不和程度であれば、藩主につながる名家の嗣子ならば、藩主交代時期にも幽閉が解除されてもよいと思われる。

だが、新藩主定安は、親戚の福井藩主松平慶永(よしなが)(春嶽)や尹宮(いんみや)(久邇宮朝彦親王)をも巻き込んだ放免願いを「義父在任中軽からざる趣向を企てた」為に「国のためにも放免は難しい」と却下している。この「軽からざる趣向を企てた重罪者」と言い切っていることは斎貴排斥を目論んだということであろうが、そのような事実は一切史料には現れない。

(2) 斎貴側用人羽山平七郎の日記

しかし、斎貴隠居後、側用人として隠居瑤光翁（斎貴）に仕えた羽山平七郎重樹の日記「御用頭書」の文久2年(1862)12月4日の記述に、比叡山の護心院という僧は忠太郎の親友であったため、忠太郎の赦免願いを梶井宮や伏見宮を通じて提出してきたがお断りになったと書かれ、さらに、「忠太郎より如何様之手續を以、いつ方へ何を可申出も難斗、御不安心畏候間、夫等之義無之様二与被仰出二付則千助（朝日）殿方へ罷出申述候」と記述されているのは、叡山の僧を通じて京の公家方が赦免願いを出して来たことを知った斎貴の心境を述べている。これからも誰かを通じて赦免願いを出てくるかもしれないという不安を斎貴は持っていたような書きぶりである。そして、同日の記述に、「広瀬藩家老の片山主膳も御目付が月々出かけて改めをしている」とわざわざ書き上げている。そして、「この上のやり方はどうしようもないので、なお厳しく見張るしかない」とも書いている。

(3) 三谷忠太郎と三谷家

この羽山平七郎筆の「御用頭書」は忠太郎と共謀したとされる広瀬藩家老片山主膳が並列して記された、めずらしい史料である。ここから二人の同罪が伺え、共に「厳敷見張る」しかないとまで書いている。この日記の文面からは斎貴もその周辺の者も忠太郎への何がしかの恐怖心を持っているようである。新藩主定安も忠太郎を則誅伐出来ず、赦免願の対応も、全家老の合意を得てから却下している。しかし、忠太郎の父、権大夫はしばらく逼塞の後、家老へ再任され、その跡目も團家へ養子に出ていた忠太郎の弟仲が、夫婦で三谷家へ復籍し、8代目の三谷権大夫となった。これらの三谷家への処罰の緩さと名跡復帰再興の事は、藩祖直政出自の家系の重さ故であったと思われる。

だが、忠太郎個人への注意が緩むことがなかったのは、忠太郎の犯した罪が重罪に値することであったことの証明か、また、自由になった折、また何かが起こると考えての事だろうか。忠太郎にはなにがしかの実力、人を恐れさせる胆力でもあったのであろうか。かつては、自分より7歳下で17歳になった部屋住み嫡子であった忠太郎を早々に取り立てた斎貴は、その後重要ポストに忠太郎を就かせ、側近く置き、時には名代としての役目も負わせるなど、15年余の間寵臣としてあつかい、心を許したであろう人物をこのときなぜ怖れたのであろうか。裏切りの憎しみであったのか。

(4) 斎貴の孤独

斎貴は歴代松江藩主の中で、後世「やんちゃ殿さん」など庶民から呼ばれる奇抜な行動をしたとされる人物である。斎貴の乱れは何に起因するのであろうか。生来の質に加え、その境遇も影響があるかもしれない。

斎貴には実兄弟はいない。実母は斎貴が誕生した文化12年(1815)3月18日から1年後の文化13年に23歳でなくなっている。その出自は、江戸桜田備前町上総屋権七の娘で於八百といった。誕生早々正室(斉恒室で後の月映院)の子となり、そのもとで若様として、育てられることになった。二人の妹は共に異母姉妹で、幼少期に二人とも亡くなっている。肉親が周囲にいない状況で成長した斎貴(幼名鶴太郎)は、文化14年(1817)4月、3歳の時、御丈夫届けが出され、その際、誕生が表向き文化8年(1811)とされ、表向き7歳として届けられていた。(野津家資料「御家譜略」「斉斎公年譜」)。そして、文政5年(1808)3月父斉恒が亡くなり、5月、実年齢8歳で襲封し9代松江藩主となった。そこへ8歳の斎貴の前に、2歳年上の弟が現われたのである。

(5) 義弟駒次郎

文政5年10月、斎貴に義理の弟が登場した。斎貴に万一のことが発生したときの控えとしての弟であったことは明らかである。この義弟信進(のぶゆき)は、津山藩主斉孝の二男であり、後の10代松江藩主となる定安の兄である。文政6年4月江戸へ着いて以降斎貴と共に成長した。史料には駒次郎として登場する。

この義弟は「雲州家系」によると「文政元年(1818)7月14日雲州で生まれ」と書かれている。さらに「同姓越後守斉孝二男」と記されている。越後守とは津山藩主斉孝である。そして、後に駒次郎は、駿河國小島藩1万石松平(瀧松)信賢の養子となり小島藩1万石の9代藩主となる。

この駒次郎の年齢も別にあり、誕生は文化10年（1813）7月14日との説もある。それは斎貴誕生が文化12年（1815）3月14日であるために、弟として届けるには年齢の逆転はあり得ぬことであるため、駒次郎の誕生を5才ずらして正式としたのであろうか。しかし、表向き届けは斎貴が文化8年（1811）としているから駒次郎の誕生を偽らなくていいであろうに用心をしたのか、後世の書き換えか不明である

さらに生誕地も系譜には雲州としてあるが、「斉齋公年譜」には文政5年10月18日津山を出発し、23日に松江城に入ると記されている。それから翌6年3月25日に松江を発して4月22日に江戸へ着いたと記録している。江戸屋敷での兄弟の生活は25年余になるが、二人の仲を示すべき史料は見えない。しかし「斉齋公年譜」にときおり、両殿が共に行動したことが記録されている。そして、嘉永2年（1849）5月に斎貴は駒次郎を伴って帰国している。そのとき二人は、出雲国の領民達に大歓迎を受けている。そして、失望をも与えたのである。その様子が松江の大商人新屋（瀧川）の分家和多見新屋の手代太助が書いた日記「大保恵日記」に記録されている。

（6）新屋太助が記録した斎貴・駒次郎兄弟

しばらく「大保恵日記」の太助の目と耳を通して入ってくる斎貴と駒次郎の出雲での様子を追ってみる。

「大保恵日記」には殿様・駒次郎様として嘉永2年（1849）の日記から頻繁に登場する。嘉永2年5月には斎貴と駒次郎は二人ずれで出雲に帰ってきた。5月7日の記に「閏4月23日に江戸を出立し、駒次郎様同道にて別して賑々しく当月17、8日頃御入国か」「殊に安来からお城まで京都御上洛の行列にて御入国と聴き」喜ぶ町民の様子が書かれている。

そして5月23日に米子を過ぎ、24日に御両君は九ツ時御入国になった。殿様の前の帰国は3年前で、今回斎貴は、出雲に入り、安来から弘化2年（1845）9月將軍名代として上洛した時の行列を再現して松江入りをしたのである。「御上洛之節の供前にて、今日群衆する事山の如くで、郷方からも何

万人も出てきて、松江城下始まって以来の人手」となったと太助は書いている。この国入りの時、殿様と駒次郎様と行列を見物するため山の如くの群衆が集まったというのである。それは、松江に城が出来て以来の賑わいだったとまで太助は書いているので、領民が藩主帰国を喜び、賑々しい行列見物をした興奮度が伝わってくる。

それから、二人は佐田で行なわれた実盛虫送りの見物をし、6月27日には大橋での花火見物も計画され、京店本家の新屋にお越しになるというので、宿となる新屋本家はもとより、白潟・末次両町ともに大賑々しく準備万端調えた当日、急遽お越し取りやめが通達された。しかし代役が立てられ殿様と全く同様に接待がなされたと太助は詳細に書いている。この名代役には間瀬源蔵・三谷忠太郎・中田要があたり、その他、御女中衆も定式通りに扱われ接待され花火見物が行なわれたのである。忠太郎はこのとき斎貴の名代であった。

このように突然花火見物のキャンセルがあったすぐ後、7月3日の日記に「両君様5月24日（ママ）御入国にて国中万民喜び居る処に又々当年9月へ御発駕という争承り悲しむ」と書いている。さらに6日にも評判として「両殿様6年ぶりに御入国されたのに9月江戸へ御初駕と申承り万民大いに力を落とす候、当年は順気よろしく豊年の様子に諸民悦び更に両殿様御在国にて猶々悦び居る処、前の評判に力を落とす」と書いている。帰国した藩主は国元に1年間は滞在するのが常であるが、斎貴はすぐ江戸へ行きたくなったのである。

その後の二人の行動は駒次郎が宍道湖北路廻りで杵築大社・日御崎神社へ参詣している。8月12日、13日には平田薬師で行なわれた角力・芝居を見物し、8月14日大社・御崎社を参詣したことを太助は書いている。そして斎貴は8月20日に松江の白潟天満宮の参詣をしたようである。「御参詣のよし」とだけ太助は記している。

そして9月4日「殿様今日江戸表へ御立ちにて両町一統静かなり、誠に当5月26日（ママ）御入国有り、3月頃御立ちと悦び居けるが御入国のその年に又御立ちの争御先代にも無之と嘆く」と書いて藩主の気まぐれを庶民太助は嘆いている。斎貴は領民を失望させてしまったのである。

(7) 動乱の予兆

この帰国の翌年、突然に駒次郎が駿河國小島藩1万石松平（瀧松）信賢の養子に出された。津山5万石の二男から、18万6千石の世子控えの立場から、養子に行くにしてもわずか1万石の小大名の所というのは、解せないことであったのか旧版『松江市誌』で「黒川正健私記」を用いて、この駒次郎を離縁してのち、用人安藤貞兵衛を中心に三谷忠太郎等が、広瀬藩家老と共謀して、斎貴の俗に「ヤンチャ殿さん」などと呼ばれる無茶ぶりを増幅させ、廃嫡を企てたとの趣旨が書かれている。たとえ、斎貴が放蕩贅沢酒食放埒のために廃されても駒次郎が居れば、安藤貞兵衛一派が広瀬藩主直諒を据えようという企ては成り立たないために、駒次郎を早々に他家へ養子に出す算段をしたのだと述べている。そもそも、この安藤貞兵衛が首謀者と書いている「黒川正健私記」の記述の裏付けは見い出せない。しかし、庶民の中にもそのことが噂として広まっていたことは確かなようで「大保恵日記」にも頻繁に安藤貞兵衛のことが記されている。

斎貴の無茶ぶりも駒次郎が養子となって屋敷から去った翌年、極めつけの行動をしている。それは武蔵国砂村に広大な別邸を建てたのである。これについては「大保恵日記」で太助は驚きの記録を残している。そして、参勤で帰国するとしながら直前に母月映院の病などを理由に延期し続ける。そして、ついに仕置役塩見増右衛門の諫言切腹という事態が発生した。

今回は一連の御家騒動・忠太郎幽閉事件とどのように関わるか明確ではないが、斎貴の国元での噂、首謀者と『松江市誌』に書かれた安藤貞兵衛、片山主膳の顛末などを、「大保恵日記」「御用頭書」「郷方留」などによる記述をもとに記してみる。

(平成28年10月13日／史料編纂課・内田文恵)